

真実の人の系譜

流祖上泉伊勢守は永禄8年(1565年)に柳生宗石舟斎宗殿に授けた一国一人の印可状にて、表太刀(燕飛、三学、九箇)までは、順次教えても良いが、そこから奥は「真実の人」に限ると明言しています。

○此已後、御執心之旁々御座候ハバ堅く諸段をもつて九ヶ迄御指南尤候。其上之儀ハ真実之人によるべく候。(印可状)

石舟斎は、これを受けて兵法百歌において、思いやり(仁)、人間の行うべきすじみち(義)、礼儀(礼)、物事を理解し是非・善悪を弁別する知恵(智)、誠(信)の五常を常に気遣うこと、また、あたたかみ(温)、すなおさ(良)、うやうやしさ(恭)、ひかえめ(檢)、人を先に立てる事(讓)は、兵法の極意(心法)であり法度であると明示しています。

- 兵法の極意に仁義礼智信たへずたしなみ気づかいぞよき (兵法百歌)
- 温良恭儉讓は新陰の兵法の法度極意なりけり (同上)

また、石舟斎の遺した柳生家憲では、他人の優れた所を謙虚に学び、人と争わず、昨日の自己を乗り越えることができるように日々向上努力を続けるようにと我々に訓辞しています。

○一文は無文の師、他流勝つべきにあらず。きのふの我に今日は勝つべし…(柳生家憲)

兵庫助利殿は、兵法は普通の人々がこれを学ばば身を、君主の場合は国を、天子の場合は天下を治めることとなる。普通の人より君主、天子までこの道は同じであると、修身としての兵法を説いています。修身治国平天下の道は一、即ち己の徳を高め人の模範となることでもあります。

○庶人之を学ばば即ち身を治め、君子之を学ばば即ち国を治め、天子之を学ばば天下を治む。庶人より王侯天子其の道一也。(始終不捨書)

また、始終不捨書の奥の大綱として、直き正しき真心もちて誠の道に違ふことなく、白い玉に少しも傷がないように我が心を磨き上げることを当流の真髓としています。

○奥の大綱、…白圭無拈(始終不捨書)

武士の生活行動規範である武士道は世界に誇ることができるモデルです。その規範の基になった武道は、身体と心の両面から人としての徳性を高めるものです。当流においては、真実の人の系譜として表されています。

また、当流は、敵をすくめて勝つという殺人刀ではなく、敵を誘い働かせて、敵に随って勝つという活人剣を特徴とし、その理念を実際の技として身体と心を通して道場の稽古において錬磨し、実際に確認することができます。

現代の日本人に祖先の智慧を再評価してもらい、それを正しく次世代に伝えると共に、世界の人々へも我々の遺産を紹介して行きたいと思っています。

流祖上泉伊勢守以来、第二十二世宗家の私まで伝わって参りましたのは、歴代の尾張藩藩主の方々を初め、代々の宗家を支えた家族、親族、高弟門弟、その他有縁無縁の方々の当流に対する純粋な支援後援の結果と誠に有り難く深く感謝しております。尊くも荘厳な剣の道へと育ててきた人々の心の清く美しい姿が、赤く新陰流史に燃え輝いていることを誇りに思っております。

(注)

平成20年6月8日、午後1時30分～午後3時。徳川美術館特別企画、「尾張柳生家の剣術一解説と演武」より抜粋